

力を尽くして全力で物事に挑む姿は、心を打つものです。たとえ結果につながらなくても、その経験そのものが、自身にとってかけがえのない財産となるものです。

A氏は、かつて甲子園出場を目指した野球少年でした。自身でプレーしなくなった今も、プロ野球観戦は一番の趣味です。毎年、新しい年が明け、12球団がキャンプに入る頃になると、シーズンの開幕が今か今かと待ち遠しくなります。

そんなA氏ですが、毎年7月頃だけは、プロ野球の話題が少なくなります。理由は、甲子園を目指して闘う高校野球のシーズンが始まるからです。

全国高等学校野球選手権大会、通称「夏の甲子園」は、昨年、100回記念大会を数えました。毎年、全国約3800校が参加し、野球ファンのみならず郷土の代表を応援する、夏の風物詩といもいえる大会です。

高校3年生にとって、夏の大会は「負けたら明日はない」特別な大会です。勝ち上がらない限り、高校生活最後の大会になるからです。球児たちは、入学から2年と数カ月の限られた期間、甲子園を目指して朝に夕に厳しい練習を重ねます。その成果を最後の大会に出し切ろうと、全力を尽くしたプレーが繰り返されます。

もちろん、春の甲子園大会や日頃の試合でも、決して手を抜いているわけではありませんが、「負けたら明日はない」状況は、「負けても明日がある」状況に比べて、同

1月のテーマ | 全力を尽くす

全力を尽くす時 更なる力が湧く



じ試合でも、別の空気が醸し出されるものです。

一歩も退くことのできない、絶体絶命の状況を指した「背水の陣」という言葉があります。強大な敵の前に、自軍の兵の練度が低いことを知った将は、川を背にした常識外れの布陣を引きます。退けば、溺れ死ぬしかない状況に必死になった兵士が奮戦し、勝利を得たという中国の故事を元にした言葉です。

人間は後がない状況や非常の場面において、通常では考えられないような能力を発揮することがあります。技術的に見れば、プロ野球選手に比べて未熟であるはずの高校生が、プロの試合でもなかなか見ることのできないようなスーパープレーをやつてのける瞬間などは、まさにそうした場面でしょう。

作り出された状況であれ、咄嗟の行動であれ、そのことに対して全力を尽くさなければ、良い結果が生まれないことは明白です。先のことを考えて力を出し惜しむことは、実際に、先の場面に到達した時にも先を考えて、力を出し惜しむことにもなるでしょう。

A氏は、「夏の大会で負けた球児たちが泣くのは、ただ悔しいからじゃない。全力を尽くして闘った結果が負けとなり、これで高校野球も終わるんだと思うと、自然に涙が流れるんだよ」と、自身の経験も踏まえて語ります。涙を流すまで…とは言わなくとも、事の終わった後に「全力を出し切った」と感動できる場面を数多く持ったいものです。